

I型アレルギーと可視総合光線療法

一般財団法人光線研究所
研究員 中堀 浩
所長 医学博士 黒田一明

光線療法を始めるきっかけになった疾患や症状は患者様により様々です。普段から非常によく見られる鼻炎、蕁麻疹、アトピー性皮膚炎、湿疹、喘息、腸炎などで光線療法を親戚や知人に紹介され行った結果、早期に病状改善が見られたことが、光線療法への強い信頼に繋がったという声をよく耳にします。

これらの症状はアレルギーによるものです。今回は、アレルギー症状が起こる原因と光線療法の効果について解説します。

■アレルギーとは

体外から細菌、ウイルス、花粉など異種タンパクが侵入したり、体内に自己抗原が生じた場合に免疫反応が起こります。その中で体にとり不利に作用して組織障害を起こすものをアレルギーと言います。従来、アレルギー反応は即時型（アナフィラキシー型）と呼ばれるI型から遅延型と呼ばれるIV型に分類されてきました。最近ではアレルギー疾患ではこれらの型が別々に起こるのではなく、いくつか同時に、あるいは時間をおいて誘導されているという説が主流になりつつあります。

今回は最も多く見られるBリンパ球が産生する抗体（免疫グロブリン）が関係するI型を中心に解説します。免疫グロブリンには、IgG・IgM・IgA・IgD・IgEの5種類がありますが、I型では免疫グロブリン全体の0.001%以下しか存在しないIgEがアレルギー反応のきっかけとなります。

■I型アレルギーの主役は肥満細胞

肥満細胞は、肝臓などの臓器を作っている細胞ではなく、白血球などのように一つ一つが独立しており血流に乗って移動することが出来ます。特に鼻、気管支、腸粘膜や皮膚の内側に多く存在しています。肥満細胞は広い細胞質を持ち、そこで様々な物質を生成し顆粒と言われるところにため込んでいます。そして表面にはIgEの受容体を持ちたくさんのIgEと強力に結合しています。そこにIgEと結びつく抗原が侵入してくるとIgEとの反応で顆粒中の物質を放出します。これらを化学伝達物質と言いますが、代表的なものにヒスタミンがあります。

■ヒスタミンの作用

1. 血管：血液中の水分が血管外に漏れ出し組織がむくむ。
2. 平滑筋（組織の筋肉）：筋肉の収縮を持続させる。
3. 粘液腺：粘液分泌を高める。
4. 神経：自律神経のバランスを崩す。
5. 白血球：好酸球、好中球を呼び寄せる。

これらの作用により、皮膚では、発赤・むくみ・痒み、鼻では、鼻水・鼻づまり・くしゃみ、腸では下痢、腹痛などの症状が起こることになります。加えて、自律神経の異常など全身に様々な症状が現れます。

アレルギー症状を起こさないようにするためには、肥満細胞からヒスタミンなど化学伝達物質が放出されないようにすればよいわけです。そのためには、原因物質の除去が重要であり、さらに組織の過敏性を解消させることも有効な手段になります。特に、自律神経のバランスが崩れるとアレルギー症状を起こしやすくなったり、症状を悪化させることになります。

■可視総合光線療法

ストレス、過労、睡眠不足などにより体が冷えると自律神経のバランスが崩れ、アレルギー症状が起こりやすくなります。このような時には光と熱エネルギーの補充により体が治そうとしている自然回復力を後押しする光線療法が効果的になります。光線療法は、近赤外線から可視線、そして紫外線の一部のフルスペクトルを同時に皮膚に照射することで、末梢の毛細血管まで十分に拡張させ、末梢組織まで新陳代謝を盛んにして体調を整えます。また、全身の血液循環を改善させてから局所照射を行うと、局所での血流改善がスムーズに行われ、ヒスタミンをはじめとする化学伝達物質の濃度を薄め、アレルギー症状を起こしにくくします。

さらに、光線照射により皮膚で産生されるビタミンDには強力な免疫調整作用があります。中でもリンパ球の抗体産生を抑制してアレルギー反応を起こしにくくする作用があります。

◆光線治療

治療用カーボン3001-5000番、3001-3002番、3001-4008番などの組合せを用い照射します。まず下肢全体の血液循環を改善させることが重要なため、両足裏部⑦、両膝部②、腹部⑤、腰部⑥各5~10分間の照射は様々な症状にかかわらず必要です。また、冷えやむくみの症状により、両足首部①、腓腹筋部⑨なども適宜追加照射します。その上で症状の出ている患部に集光器を使用して10~20分間照射します。

■治療例1

アレルギー性皮膚炎 19歳 女性 歯科衛生士 162cm 44kg

◆**症状の経過**：子供の頃からアレルギー体質で特に顔や背中に湿疹が出来やすく、特に春先は症状が悪化しやすかった。アレルギー性鼻炎もあり、常に鼻詰まり状態で口呼吸をするため喉も痛くなりやすかった。長年ステロイド剤で症状をコントロールしてきたが副作用が心配になり、3カ月前からステロイドを使わない皮膚科に通院していた。しかし、痒みや痛みで熟睡出来なくなった。体の冷えも非常に強かった。友人の紹介で当附属診療所を受診した。

◆**光線治療**：3001-3002番の治療用カーボンを使用し、⑦①各10分間、②⑤⑥、後頭部③、咽喉部④（左右正面）、目・鼻部⑩各5分間照射。

◆**治療の経過**：皮膚が過敏になっていたため、陽性反応に注意しながら自宅で毎日光線照射した。治療開始2カ月で痛痒さが我慢出来る程度となり、熟睡出来るようになった。3カ月後には皮膚の乾燥が改善されしっとりしてきた。痒みもなくなり疲れにくくなってきたが、下半身の冷えは改善せず便秘や生理不順は続いていた。8カ月後の現在、皮膚の状態はさらに

良くなり、痒みは完治した。冷えも改善し鼻の通りも以前より良くなり口呼吸は少なくなった。食欲も出て体重が1kg増えた。体調維持のため光線治療は欠かさず継続している。

■治療例2

アレルギー性鼻炎 75歳 女性 主婦 154cm 58kg

◆**症状の経過**：50歳過ぎより花粉症を発症した。星状神経節ブロック治療で症状を抑えていたが、3年前にその主治医が亡くなり治療を受けていなかった。その後、年中鼻が詰まるようになり、耳鼻科でアレルギー性鼻炎・鼻茸と診断された。点鼻薬の効果は一時的で、鼻の奥に不快感が残り気分が晴れなかった。1年前から歩行時に左足底痛があり、最近では立ち上がり時に左膝痛も出るようになった。友人の紹介で当附属診療所を受診した。

◆**光線治療**：3001-4008番の治療用カーボンを使用し、4台の治療器で⑦①②③、⑦⑤⑥、鼻部⑩、⑦④各10分間照射。

◆**治療の経過**：当所へ週2～3回通院治療を行った。治療4～5回目までは、治療後に鼻水が大量に出たが、その後は暫く鼻のとおりが良かった。治療8回で膝痛が解消、鼻詰まりも軽減し、鼻詰まりがない時間が増えてきた。治療10回目からは足が温まり鼻が通る様になって来た。治療開始1カ月後（治療12回目）に耳鼻科検査で鼻茸が半分以下に縮小しており主治医に驚かれた。治療15回で左足底痛も完治し、鼻詰まりが気にならず熟睡可能となった。現在、治療開始開始後2年であるが週1回の通院で良好な体調の状態を維持している。

■治療例3

アレルギー性結膜炎 62歳 女性 主婦 151cm 62kg

◆**症状の経過**：若い頃より洋服の仕立て直しの仕事をしてきた。細かい作業が多いためか、4～5年前から、眼が充血したりゴロゴロする不快感が頻発するようになった。特に春と秋に発症しやすく、眼科ではアレルギー性結膜炎と診断され、点眼薬でコントロールするしかないと言われていた。先日の健康診断で高血圧症と高脂血症の指摘もあり服薬を勧められた。全身状態を改善には光線治療が良いと知人に勧められ当附属診療所を受診した。

◆**光線治療**：3001-5000番の治療用カーボンを使用し、⑦①、背正中部⑳各10分間、②⑤⑥、肝臓部㉑、③⑩各5分間照射。

◆**治療の経過**：自宅で毎日光線照射を行った。光線治療1カ月後には、1日4回の点眼が1～2回で済むようになった。眼の充血やゴロゴロ感もでなくなった。足が温まり血圧も正常範囲で安定するようになった。